

水洗施設の表現手法

水洗施設の仕組みをより理解しやすいように3つ便槽を別々の表現で復元しました。

1 発掘調査で発見された状況

発見調査当時の粘土の地山層が見えます。水洗施設はこの地山を掘り込んで木樋が埋められ、沈殿槽に続いていました。



1 便槽のぞき込み

2 遺構から推定した水洗施設の仕組み

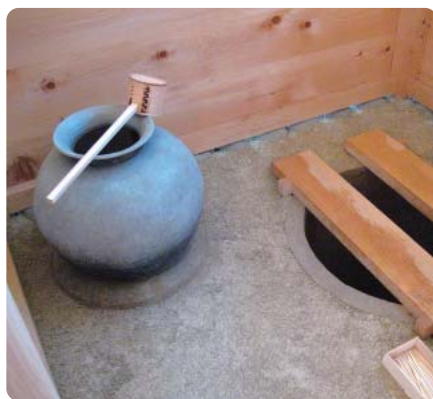
便槽に大きな曲げ物容器が据えられ、溜まった汚物は木樋の管を通して沈殿槽に流れていったと考えられています。



2 仕組みのぞき込み

3 推定される使用状況

便槽を跨ぐ踏み板が載せられ、傍らには水を溜めた須恵器甕と柄杓、籌木の模型が据えられています。



3 使用状況



1 沈殿槽側から



2 沈殿槽側から

発見された遺構の様子と、復元された奈良時代の様子を比べてみよう。



その他の整備計画

史跡公園整備計画はこれからも続き、現在は秋田城の中心施設である政庁域と、政庁域から外郭東門に至る大路の復元に取りかかっています。

将来的には、既存整備箇所との連携を図りながら、さらに広範囲への展開や、秋田城跡をより詳しく知

るための資料館等の建設を計画しています。

また、今後の発掘調査成果に応じて、新たな復元対象を加えるなどの柔軟な史跡整備の推進を行い、より良い史跡公園づくりを目指していきます。

秋田城跡の各種事業やイベントに関するお問い合わせは

秋田市教育委員会 秋田城跡調査事務所

〒011-0907 秋田市寺内焼山9番6号

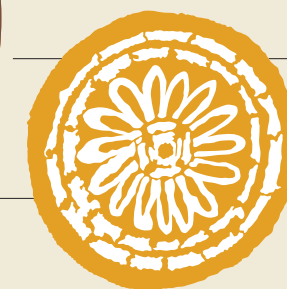
TEL.018-845-1837 FAX.018-845-1318

URL <http://www.city.akita.akita.jp/city/ed/ac/Default.htm>

E-Mail ro-edac@city.akita.akita.jp



あきまる 秋麻呂くん 通信



『秋田城』と、みんなの絆をつなぎたいから。

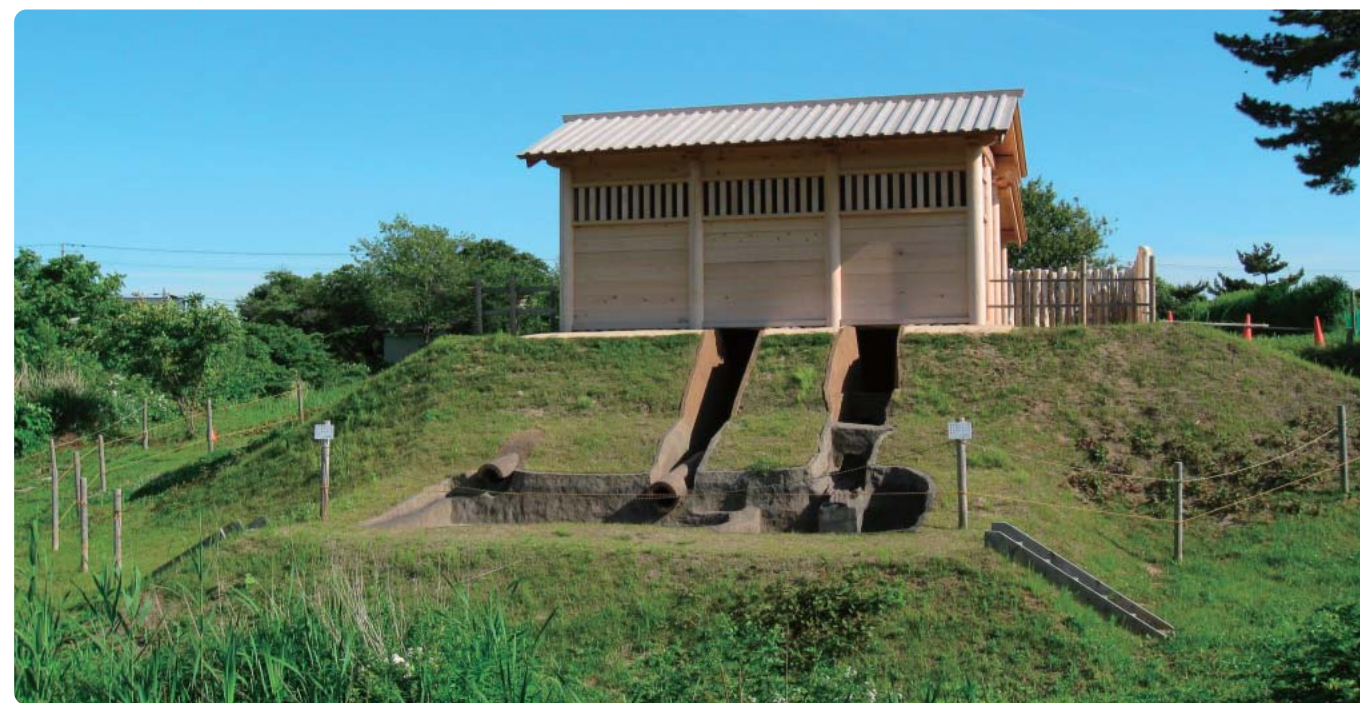
水洗廁舎特集

平成21年7月31日 秋田城跡調査事務所



秋麻呂くん

秋麻呂くん通信は、みんなに秋田城のことを良く知ってもらい、秋田城との絆を深めてもらうための情報誌です。今回は、先日復元が完成した古代水洗廁舎を中心に、史跡環境整備事業について紹介します。



古代水洗廁舎とは

平成6・7年に行われた第63次発掘調査で、鶴ノ木地区東側にある沼地の岸辺から、奈良時代後半の掘立柱建物と、水洗施設の機能が一体となった遺構が発見されました。

周辺には寺院や客館(迎賓館)と考えられる建物群が存在し、都にもないような立派な施設であることから、この廁舎はとりわけ重要な人達が使っていたと考えられています。

また、沈殿槽からは当時の食生活を知ることができる種実や寄生虫の卵が大量に出土し、たいへん貴重な資料を得ることができました。平成14年度から復元に向けての検討が行われ、平成21年3月に復元工事が完了しました。



■外郭東門の外側、奈良時代の客館や寺院と推定される建物群に隣接しています。

発掘調査で分かったこと

水洗廁舎跡は、周辺と区画する目隠し塀、梁間2間・桁行3間の建物に廂1間が付く掘立柱建物と、便槽・木樋・沈殿槽を備えた水洗施設で構成されています。

水洗施設は、建物内に3基並んだ便槽から約6度の傾斜を付けた木樋を通じて北側にある沼地を掘り込んだ沈殿槽に流れ、浄化された上澄みだけが沼地へと溢れ出る仕組みとなっていました。

このように建物と水洗施設が一体化した古代のトイレ遺構は全国でも唯一のもので、特別な施設であったことが推定されます。



■水洗廁舎跡の構成



■全景
縦横に並ぶ建物の柱穴と、深い便槽や木樋が組み合わさっています。



■便槽の断面
深さは2m以上で、底には直径80cm程の容器が据えられていました。



■木樋
材質はスギとヒノキアスナロで、奈良時代後半の年輪が確認されました。

沈殿槽は情報の宝庫

沈殿槽に溜まった土の中にはトイレトペーパーの役割をしていた籐木や、汚物などに含まれていた種実類、当時の環境を示す花粉や昆虫の死骸などの有機物が腐らずに残っていました。

有機物を詳しく調べたところ、寄生虫の種類から、地元の人がほとんど使用していないことが分かりました。また、当時の日本にはなかった豚食に伴う寄生虫の卵も発見されたことから、交友があった中国大陸の渤海国からの使者が使ったことも考えられています。



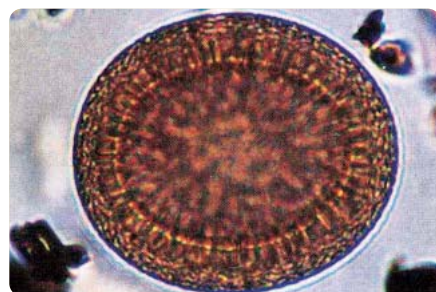
■沈殿槽遺構



■沈殿槽埋土断面
イネ・ウリ・ナスなどの種実類や、寄生虫卵が大量に見つかりました。



■籐木
用便後は、この木片を使ってお尻を拭いていました。



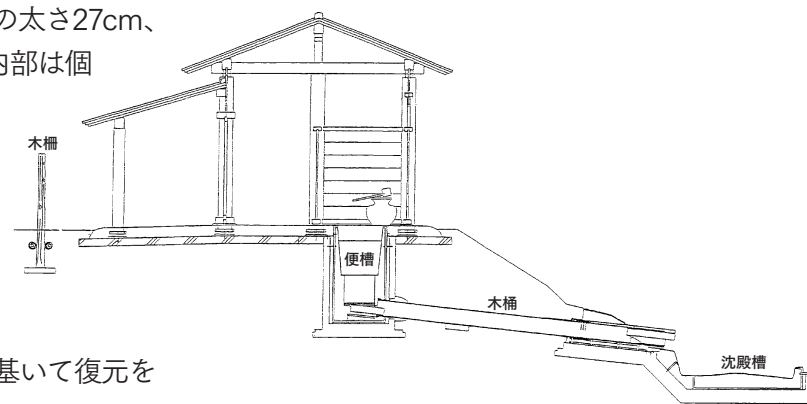
■有鉤条虫卵
豚食と関係する寄生虫の卵です。他にも沢山の種類が見つかりました。

推定される水洗廁舎跡の姿

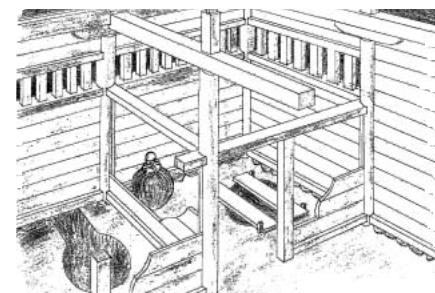
発掘調査やその後の検討の結果、建物は柱の太さ27cm、軒の高さ4.25m、切り妻造り板葺き・板壁で内部は個室に分かれており、便槽の反対側に出入りが設けられていたことが推定されています。

なお、周辺に水路や樋などの導水施設が発見されていないことから、甕などに水洗用の水を溜めておき、柄杓などを使って流していたと考えられています。

これらの調査成果や、専門家による検討に基づいて復元を行いました。



■設計横断面図



■設計イメージ
立派過ぎず、明るく、臭いがこもらないように、個室の扉がありません。



■須恵器大甕
城内から沢山発見されている大甕は約79リットルも水が入るものです。



■推定イラスト
床板が張ってあった場合の推定図です。復元では土間を採用しました。

復元の見どころ

実際に水洗廁舎跡を訪れて、注目していただきたい見どころがたくさんあります。



■格子窓・妻壁
採光と臭い抜きのために格子窓を設け、妻壁は付けていません。



■柱
建物にはヤリガンナの仕上げ痕が残り、屋根は舟肘木で支えています。



実際に水を流すことができるんだよ。奈良時代の気分になって流してみよう。



■沈殿槽
沈殿槽の色は発掘調査で検出された瞬間の土の色を再現しています。